

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第56集

# 館林市内遺跡発掘調査報告書

－平成29年度（1月～3月）各種開発に伴う埋蔵文化財調査－

新宿二丁目遺跡 (平29地点)  
 笹原遺跡 (平29D地点)

2018  
館林市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、平成 29 年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。地点名は、平成 29 年度の調査地点は「平 29 地点」とする。  
猿原遺跡　新宿二丁目遺跡
3. 調査組織は次のとおりである。

　　調査主体者　館林市教育委員会

　　担当課　文化振興課文化財係

(H 29 年度)	教育長	吉間 常明	(H 30 年度)	教育長	吉間 常明
教育次長	金子 和夫		教育次長	青木 伸行	
文化振興課長	戸叶 俊文		文化振興課長	戸叶 俊文	
文化財係長	阿部 弥生		文化財係長	阿部 弥生	
主任	奈良 純一（副担当）		主任	奈良 純一（副担当）	
主任	田沼 美樹		主任	田沼 美樹	
主任	宮田 圭祐（担当）		主任	宮田 圭祐（担当）	
主事補	小林 松嗣		主事	小林 松嗣	
主事補	小林 里穂		主事補	小林 里穂	

4. 調査作業員・整理作業員（50 音順敬称略）

　　浅川 大三郎　小倉 政義　小貫 慎子　杉田 和実　寺嶋 美雪  
　　西谷 義信　原田 和沙　前田 清美　三橋 瑞江

5. 出土遺物・調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集・執筆は、宮田が中心となり行った。

7. 遺物の実測・観察表およびその他の図版作成は、宮田・小貫・原田・前田・三橋で行った。

8. 調査の実施および本書刊行にあたり、下記の方々のご協力をいただいた。ここに記して感謝申しあげる次第である。（順不同、敬称略）

　　地権者各位　群馬県教育委員会事務局文化財保護課　（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団  
　　館林市都市建設部都市計画課・道路河川課　館林市政策企画部税務課　館林市農業委員会

## 凡　　例

1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。「出土遺物写真」の縮尺は 1／2 とした。
2. 遺跡位置図等は、平成 22 年度（一部平成 25 年度）発行の館林市都市計画基本図を用いた。
3. 土層断面および出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財团法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

## 参　考　文　献

- 館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 1 集～第 55 集  
館林市教育委員会 2010 『館林市史 特別編第 4 卷 館林城と中近世の遺跡』  
館林市教育委員会 2011 『館林市史 資料編 1 館林の遺跡と古代史』  
館林市教育委員会 2015 『館林市史 通史編 1 館林の原始古代・中世』

# 目 次

例 言  
凡 例  
参考文献  
目 次  
挿図表目次  
写真図版目次

第1章 館林市の環境	
1. 地理的環境	..... 1
2. 歴史的環境	..... 1・2
第2章 試掘・確認調査の概要	
1. 新宿二丁目遺跡（平29地点）	..... 3～5
2. 笹原遺跡（平29D地点）	..... 6～8
遺物観察表	..... 9
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図表目次

第1図	館林市の位置	1
第2図	館林市の地形概念図	2
第3図	平成29年度（1月～3月）調査遺跡の位置	2
第4図	新宿二丁目遺跡（平29地点）の範囲と調査地	3
第5図	調査区位置と遺構配置図	4
第6図	トレンチ配置図	4
第7図	出土遺物	5
第8図	笹原遺跡（平29D地点）の範囲と調査地	6
第9図	調査区位置と遺構配置図	7
第10図	トレンチ配置図	8
第11図	出土遺物	8
第1表	遺物観察表	9

## 写真図版目次

### 新宿二丁目遺跡（平29地点）

- 1- 1 調査地全景
- 1- 2 土木重機による掘削
- 1- 3 トレンチ1精査前（北から）
- 1- 4 トレンチ2深掘部土層断面（西面）
- 1- 5 トレンチ1性格不明遺構（東から）
- 1- 6 トレンチ1土坑6精査後（南から）
- 1- 7 調査風景
- 2- 1 トレンチ1精査後（北から）
- 2- 2 トレンチ2精査後（北から）
- 2- 3 調査完了

### 笹原遺跡（平29D地点）

- 2- 4 調査地全景
- 2- 5 土木重機による掘削
- 2- 6 調査風景
- 2- 7 トレンチ1土坑1土層断面（北面）
- 3- 1 トレンチ1精査後（東から）
- 3- 2 トレンチ2精査後（東から）
- 3- 3 トレンチ3精査後（東から）
- 3- 4 トレンチ4精査後（北から）
- 3- 5 トレンチ2土層断面（東面）
- 3- 6 トレンチ4深掘部精査後（南面）
- 3- 7 トレンチ3土層断面（北面）
- 3- 8 調査完了

### 出土遺物写真

# 第1章 館林市の環境

## 1. 地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km<sup>2</sup>である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県と埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へも約65kmの距離にあり、東京圏との結びつきも強い。

群馬県南東部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、標高15m台（大島町東部）から33m台（高根町）の平坦な低地である。本市の地形を概観すると、「洪積台地」と「沖積低地」に分けることができる。市街地が立地する「洪積台地」が東西に延び、その周辺に「沖積低地」が広がる。

この洪積台地は、「邑楽・館林台地」と呼ばれており、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根にいたる台地の北側に沿って、日本最古（約6～7万年前）の砂丘の一つである埋積河畔砂丘（館林古砂丘）が走っており、本市最高標高点(33.2m)はこの上にあった。

「沖積低地」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東に向かって緩く傾斜する傾向がみられ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は樹枝状に開析され、沖積低地に延びる多くの谷地を形成している。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地の谷には茂林寺沼・蛇沼・近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

## 2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は147ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』(市内遺跡詳細分布調査報告書)には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した各時代の遺跡数は、次のとおりである（複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめた）。

旧石器時代は4遺跡（遺物は9遺跡で確認）。縄文時代は10遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代は2遺跡（遺物は5遺跡で確認）。古墳時代～平安時代（土師器の出土した遺跡）は93遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は41遺跡）、古墳は18遺跡（古墳总数25基）、中世以降の生産址1遺跡、中世～近世の城館址は15遺跡、城館以外で中世・近世の遺物が多く出土するのは4遺跡である。

これらの遺跡の分布は地形的な特徴と大きく関わっており、館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりをおおまかに述べると、次のようになる。

### 《旧石器時代》

この時代の遺跡は、山神脇遺跡や水溜第一地点遺跡・同第二地点遺跡など、邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる埋積河畔砂丘上で多く分布している。また、大袋II遺跡や間堀1遺跡など低地を望む台地の突端の遺跡でも当該期と考えられる資料が確認されている。

### 《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増加し洪積台地上に遺跡が分布する。前期や中期の遺跡は、加法師遺跡や間堀1遺跡など、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に集落を形成している。確認できる遺跡数は後期以降減少するが、洪水堆積層の下で確認できることが多く、より低地で痕跡が残される傾向がある。

### 《弥生時代》

弥生時代の構造は確認されていないが、大袋I遺跡や小林遺跡など微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

### 《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。道溝遺跡は洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在しており、この傾向は弥生時代の遺物散布に似ている。中期には遺跡の数が増えるとともに、その所在は台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には遺跡数は増大し、北近藤第一地点遺跡や当郷遺跡など台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、推定地も含め33基が残存している（『館林市史 資料編1』参照）。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする埋積河畔砂丘上にある。その



第1図 館林市の位置

ほかに単独のものも多いが、そのいずれも谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

#### 《奈良・平安時代》

この時代の遺跡の痕跡は多く残る。台地の端部に限定されず遺物の採取ができるところから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれていたと考えられる。

#### 《中世・近世》

この時代の城跡については、伝承的な要素が多く実態は判然としない。しかし、谷や小河川などの自然地形を利用し中世末には館林城が、近世には館林城を中心として城下町が形成され、その町割りは今も残っている。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成29年度(1月～3月)調査遺跡の位置

## 第2章 試掘・確認調査の概要

### 1. 新宿二丁目遺跡（平29地点）

遺跡番号	0061
時代種別	縄文・古墳～近世（散布地）
調査地	（従前地）館林市新宿二丁目 154-1 (仮換地) 西部第一南土地区画 整理事業 38 街区 9
調査原因	個人住宅
調査期間	平成30年2月20日～2月26日 〔内5日間〕※埋め戻しは原因 者が実施
調査面積	約 53 m <sup>2</sup>

#### （1）遺跡と周辺の環境

「新宿二丁目遺跡」は館林市の市街地から南西に位置する縄文・古墳～近世の散布地である。邑楽・館林台地上で、周辺は畑や住宅地として利用されている。

本遺跡ではこれまでに3地点で調査が行われている。特に平成22年度の調査では柱穴列と、中世のカワラケと陶器が確認されている。

今回届出のあった土地は遺跡の西端付近に位置し、茂林寺川が流れる谷に面する崖線部の地点であり、基準点の標高は21.085mである。

#### （2）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

#### （3）基本層序

本遺跡の基本層序はI層～V層である。

I層は表土（層厚最大約40cm）である。調査区の西では区画整理前の隣地建物の影響と考えられる硬化層が南北に確認された。現況の耕作土もその部分の耕作は行われておらず、層厚にばらつきがある。II層は暗褐色土層（7.5YR3/3）であり、粘性ややあり、縮まりあり、ローム漸移層である。前述の隣地建物の硬化層下で、耕作の影響を受けていない部分で確認されている（層厚約10cm）。III層は上部ローム層（褐色7.5YR4/3）であり、粘性・縮まりあり。IV層は暗色带（黒褐色10YR3/2）、V層は中部ローム層（明褐色10YR5/6）である。

#### （4）確認された遺構

土坑8基（時期不明）、性格不明遺構1基（時期不明）が確認された。各遺構とも出土遺物はほとんどなくその詳細は不明である。土坑6は1.5m×1.5m程度の隅丸方形であり、表土からの深さは約25cm程度である。一部焼土も薄く確認できるが、規模から住居址ではないと判断した。

聞き取りの結果、昭和22年以降も耕作を行っているとのことであったが、重機による掘り込みのような直線的な幅80cmの溝が数ヶ所あり、堆積土もローム粒を多く含むことから擾乱と判断した。

性格不明遺構は土坑1よりもあとに掘られており、南で擾乱が確認されていたことから当初擾乱とも考えたが、方向・堆積・幅・深さ等、異なる点が多かったことから性格不明遺構とした。

#### （5）出土遺物

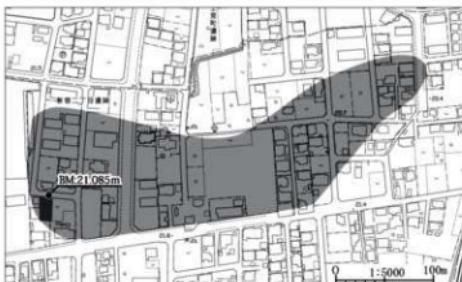
確認された遺物は、近世陶磁器片を中心に50点程度であるが、小破片であり時期の判然としないものも多い。断面黒色で少量の纖維を含む、ハの字状の刺突が施された土器片（第7図-20）が1点出土した。また、チャートの剥片も1点出土している。

#### （6）まとめ

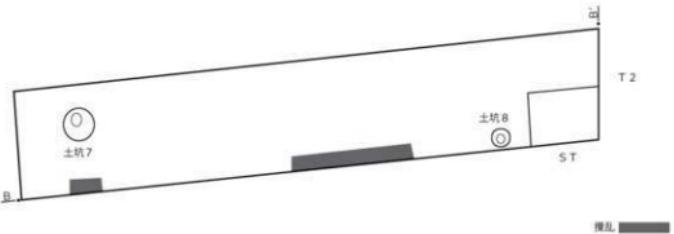
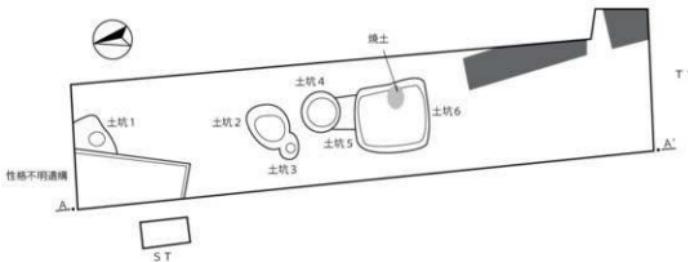
新宿二丁目遺跡ではこれまでに3度の調査（平22A・22B・23地点）が行われている。特に平成22年度の調査では、柱穴列と中世のカワラケと陶器が確認されている。

本地点はこれまでの調査地点と近接していたが、中世のカワラケや陶器は出土しなかつた。暗色帯までの深度が表土から約50cm（標高約20.800m）であることが確認された。

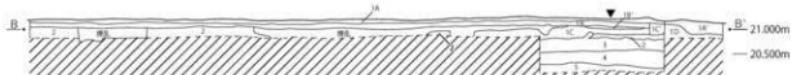
調査の結果、保存をする遺構・遺物を確認できなかつたことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第4図 新宿二丁目遺跡(平29地点)の範囲と調査地(1/5000)



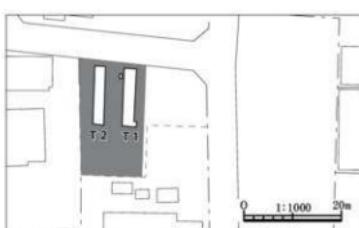
性格不明透構 a 黒褐色 10YR2/3 粘性あり、締まりなし、やや砂混じり 5mm程度のローム粒5%含む  
b 黒 色 10YR2/1 粘性ややあり、締まりなし、やや砂混じり



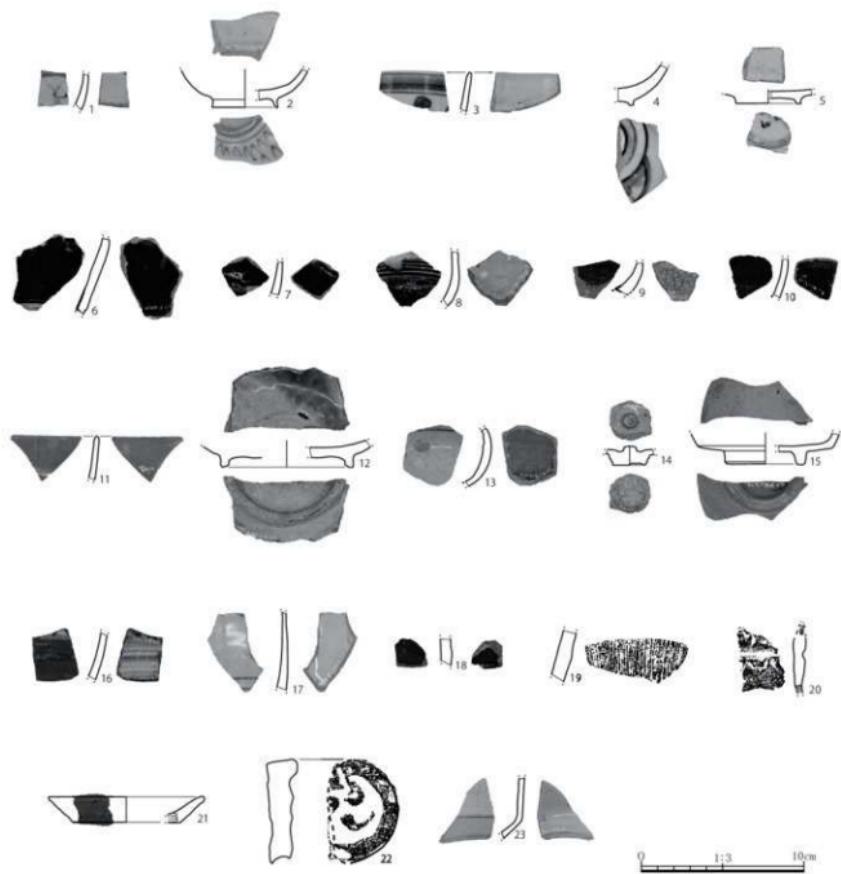
- I 1A 基褐色 10YR3/3 表土
- I 1A' 基褐色 10YR3/3 最近耕された表土
- I 1B 反灰褐色 10YR4/2 従前(区画整理前の地) 建物の基盤か(填土)
- I 1B' 黑褐色 10YR3/2 従前(区画整理前の地) 建物の基盤か(填土)
- I C 基褐色 10YR3/3 従前の影響を受けて締まり強い
- I C' 基褐色 10YR3/3 (Cより締まり弱い)
- ID 黑褐色 10YR3/3 填土
- I 2 基褐色 7.5YR3/3 ローム漸層
- II 3 棕 色 7.5YR4/3を基本に明褐色 7.5YR5/6 上部ローム層
- IV 4 基褐色 10YR3/2 基褐色
- V 5 明褐色 10YR5/6 中部ローム層

0 1:100 5m

第5図 調査区位置と造構配置図



第6図 トレンチ配置図



第7図 出土遺物

## 2. 笹原遺跡（平29 D地点）

遺跡番号	0101
時代種別	旧石器・縄文・平安～近世 (散布地)
調査地	館林市堀工町字笹原 1882- 1
調査原因	その他開発（建充分譲地）
調査期間	平成30年3月2日～3月14日 〔内6日間〕
調査面積	約 103 m <sup>2</sup>

### （1）遺跡と周辺の環境

「笹原遺跡」は館林市の南部にある旧石器・縄文・平安～近世の散布地である。邑楽・館林台地の南辺で、茂林寺沼へと延びる樹枝状の谷を望む舌状台地上に広がっており、周囲には茂林寺や県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」など自然が多く残る地域であるが、近年は住宅地などの開発が盛んである。

本遺跡ではこれまでに11点で調査が行われている。特に昭和58年度（A地点）と昭和61年度（B地点）に行われた調査では旧石器時代から縄文時代の遺物が多量に出土している。

今回届出のあった土地は遺跡の北西端付近に位置し、茂林寺川が流れる谷に面した崖線部の地点であり、基準点の標高は20.102mである。

### （2）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に3本、南北方向に1本のトレーナチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

### （3）基本層序

本遺跡の基本層序はI層～IV層である。

I層は表土（層厚最大約35cm）である。長期にわたり竹林であり、腐植土と根攢乱が多く目立つ。II層は黒色土層（10YR2/1）であり、粘性あり、縮まりなし。泥炭化が進んでおり細かい有機物を含む。T1・T2など低いところで確認（層厚約20cm程度）。III層はローム漸移層（黒褐色10YR2/2、黒色10YR2/1）であり、粘性・縮まり強い。T4のみで確認された。下層は上層より縮まりがあり、粒子が滑らか。IV層はローム層（褐色10YR4/6）である。粘性・縮まり強い。湿度で極小の砂も混じる。降雨の際、水が染み出でてくる。

### （4）確認された遺構

土坑2基（時期不明）が確認された。各遺構とも出土遺物はほとんどなく、その詳細は不明である。

地権者の話によると、戦時に食糧栽培のために取得した土地が、戦後耕作はほとんど行っておらず竹林になっていたとのことであった。そのため、腐植土の堆積と根による攢乱が確認された。

### （5）出土遺物

確認された遺物は、近世陶磁器片を中心に50点程度であるが、小破片であり時期の判然としないものも多い。チャートの剥片も確認された。平29 B地点・C地点ほどではないが、本地点からも龍泉窯系の青磁（第11図-3）が出土している。また、東側に位置する平29 A地点と同様に縁泥片岩製の板碎片（第11図-14）も出土している。

### （6）まとめ

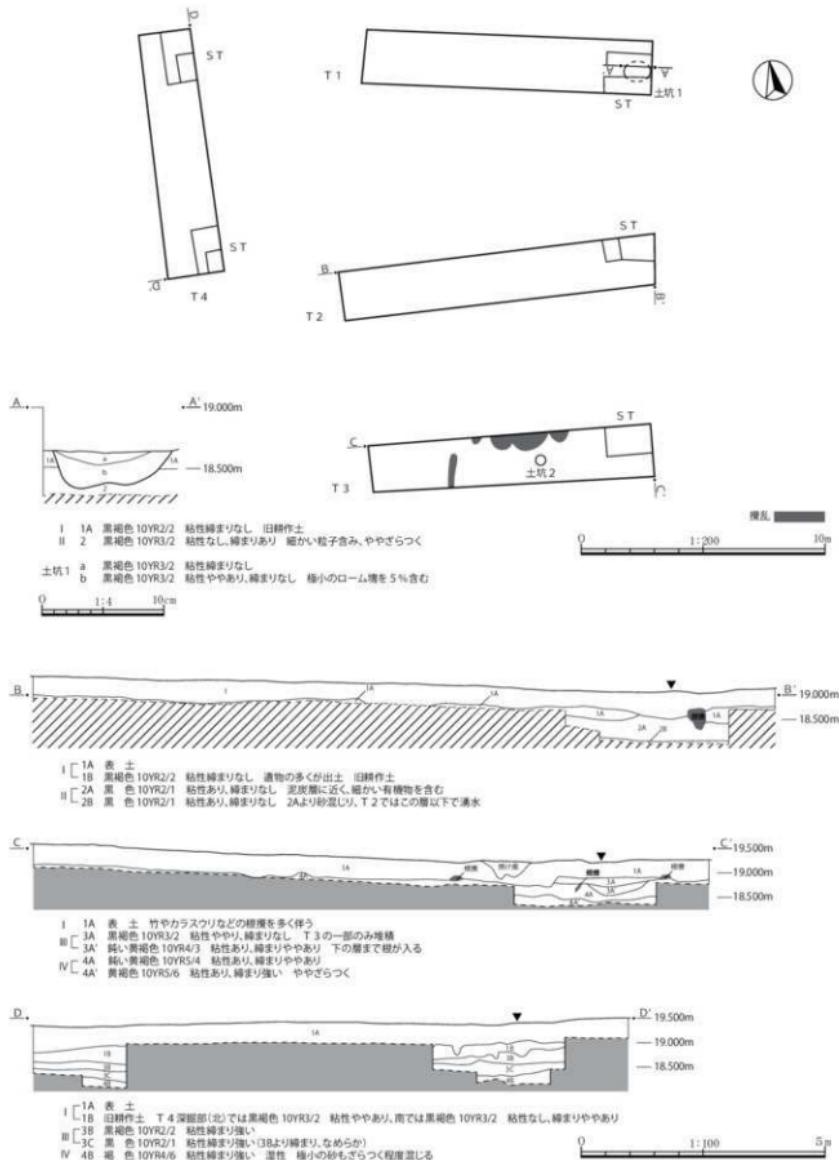
笹原遺跡ではこれまでに11度の調査（A・B、平9・10・16 A・16 B・26・27・29 A・29 B・29 C地点）が行われている。特に昭和58年度と昭和61年度に行われた調査では、旧石器時代から縄文時代の遺物が多量に出土している。

本地点は包蔵地範囲の北西端に位置しているが、平成29年度の調査と同様に貿易陶磁器が出土しており、記録はない寺院や屋敷などの存在も想起させる。また、台地上から急激に落ち込んでいく様子が確認されており、さらに北に遺跡の範囲が広がっている可能性は低いものと考えられる。

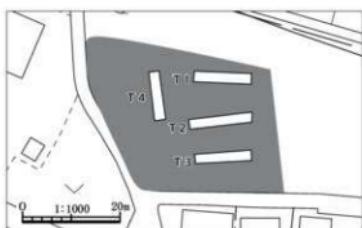
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかつたことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第8図 笹原遺跡(平29D地点)の範囲と調査地(1/5000)



第9図 調査区位置と遺構配置図



第10図 トレーン配置図



第11図 出土遺物

第1表 遺物観察表

遺跡名	図版番号	出土地点	埋蔵器種	時代	調査の特徴、残存率など	備考
新宿二丁目遺跡	7-1	T 2	染付 碗か	近世		肥前
新宿二丁目遺跡	7-2	T 2 土坑 8 穂土	染付 碗	近世	底部片	肥前
新宿二丁目遺跡	7-3	T 1	染付 碗か	近世	口縁部片	肥前系か
新宿二丁目遺跡	7-4	T 2	青磁染付	近世	底部片	肥前
新宿二丁目遺跡	7-5	T 2	染付 碗か	近世	底部片、鋸あり	肥前
新宿二丁目遺跡	7-6	T 1	天目茶碗	近世		瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	7-7	T 2	天目茶碗か	近世		瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	7-8	T 2	腰錦茶碗	近世		瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	7-9	T 1	腰錦茶碗	近世		瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	7-10	T 2	陶器 皿	近世		尾呂か
新宿二丁目遺跡	7-11	T 1	陶器 碗	近世	口縁部片	京信楽系か
新宿二丁目遺跡	7-12	T 2	陶器 皿	近世	底部片	瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	7-13	T 2	陶器 皿か	近世	色急	肥前系か
新宿二丁目遺跡	7-14	T 2	陶器 皿	近世		肥前系
新宿二丁目遺跡	7-15	T 2	陶器 各がい	近世	底部片	
新宿二丁目遺跡	7-16	T 2	陶器 鉢	近世		肥前
新宿二丁目遺跡	7-17	T 2	染付 猪口	近世		肥前系
新宿二丁目遺跡	7-18	T 1	陶器 すり鉢	中近世		瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	7-19	T 1	陶器 すり鉢	近世		丹波
新宿二丁目遺跡	7-20	T 2	深鉢	繩文	ハの字状の刺突	
新宿二丁目遺跡	7-21	T 2	カワラケ	中近世		
新宿二丁目遺跡	7-22	T 2	軒丸瓦	近世		
新宿二丁目遺跡	7-23	T 1	染付	近代		
復原遺跡H29 D	11-1	表土	深鉢	繩文		
復原遺跡H29 D	11-2	T 2	深鉢	繩文		前期
復原遺跡H29 D	11-3	T 1	青磁 碗	中世	輪連弁文	龍泉窑系
復原遺跡H29 D	11-4	T 1	陶器 碗	近世	口縁部片	瀬戸・美濃
復原遺跡H29 D	11-5	T 1	陶器 不明	近世		瀬戸・美濃か
復原遺跡H29 D	11-6	T 1	陶器 碗	近世	口縁部片	瀬戸・美濃
復原遺跡H29 D	11-7	T 1	腰錦茶碗	近世		
復原遺跡H29 D	11-8	T 2	陶器 天目茶碗か	近世	底部片	
復原遺跡H29 D	11-9	T 2	陶器 腰錦茶碗	近世		瀬戸・美濃
復原遺跡H29 D	11-10	T 3	陶器 碗	近世	口縁部片	瀬戸・美濃か
復原遺跡H29 D	11-11	表土	陶器 尾呂茶碗	近世	口縁部片	瀬戸・美濃
復原遺跡H29 D	11-12	表土	陶器 碗	近世	口縁部片	瀬戸・美濃
復原遺跡H29 D	11-13	T 1	陶器 徳利か	近世		瀬戸・美濃
復原遺跡H29 D	11-14	T 3	板碑	中世以降	縁泥片岩、銘なし	
復原遺跡H29 D	11-15	T 2	カワラケ	近世		
復原遺跡H29 D	11-16	T 3	裏面火鉢か	近世以降		

写 真 図 版



## 新宿二丁目遺跡(平29地点)

図版1



1 調査地全景



2 土木重機による掘削



4 トレンチ2深掘部土層断面(西面)



3 トレンチ1精査前(北から)



5 トレンチ1性格不明遺構(東から)



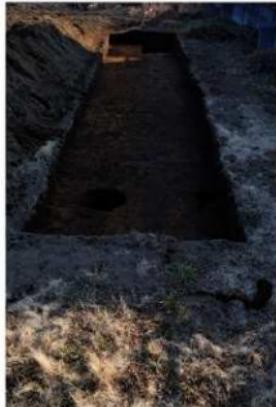
6 トレンチ1土坑6精査後(南から)



7 調査風景



1 トレンチ1精査後(北から)



2 トレンチ2精査後(北から)



3 調査完了

---

### 笠原遺跡(平29D地点)



4 調査地全景



5 土木重機による掘削



6 調査風景



7 トレンチ1土坑1土層断面(北面)



1 トレンチ1精査後(東から)



2 トレンチ2精査後(東から)



3 トレンチ3精査後(東から)



4 トレンチ4精査後(北から)



5 トレンチ2土層断面(東面)



6 トレンチ4深掘部精査後(南面)



7 トレンチ3土層断面(北面)



8 調査完了

新宿二丁目遺跡(平29地点)

図版4



笹原遺跡(平29D地点)



# 抄録

ふりがな	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書								
副書名	平成29年度(1月~3月)各種開発に伴う埋蔵文化財調査				卷次	——			
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第56集			
編集者名	宮田 圭祐				編集機関	館林市教育委員会			
編集機関所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 TEL 0276-74-4111 FAX 0276-74-4113								
発行年月日	2019(平成31)年3月1日								
市町村コード	102075								
所収遺跡	所在地	遺跡番号	緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因		
新宿二丁目遺跡 (平29地点)	(従前地) 館林市新宿二丁目154-1 (仮換地) 西部第一南土地区画整理事業38街区9	0061	36° 14' 22"	139° 31' 23"	20180220~20180226	約53m <sup>2</sup>	個人住宅		
笠原遺跡 (平29D地点)	館林市堀工町字笠原 1882-1	0101	36° 13' 52"	139° 31' 49"	20180302~20180314	約103m <sup>2</sup>	その他開発		
遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
新宿二丁目遺跡	散布地	縄文・古墳~近世	土坑8、性格不明遺構1	陶磁器					
笠原遺跡	散布地	旧石器・縄文・平安~近世	土坑2	陶磁器、板碑					

---

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第56集

## 館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成29年度(1月～3月)各種開削に伴う埋蔵文化財調査—

---

編集・発行 館林市教育委員会  
〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号 電話 0276-72-4111  
印 刷 上毎印刷工業株式会社  
発行年月日 平成31年3月1日

---